

トクヴィルの見たアメリカ

山崎 國光 *Kunimitsu Yamazaki*

(財)国際貿易投資研究所 専務理事

イラク戦争を機にアメリカの政策等に関する議論が活発になった。この機にアメリカ研究の二大古典の一つと言われ、アメリカ社会についての最初の総合的な分析と言われているアレクシ・ド・トクヴィルの「アメリカの民主政治」(注)を読み返してみた。

フランスの名門貴族出身の法律家トクヴィルは、1831年5月、当時のヨーロッパに比べて民主的であったアメリカの刑罰制度の視察のため同国を訪れた。訪問直後、視察目的を越えて幅広くアメリカの政治、社会に関心を持ち、帰国後、「アメリカの民主政治」第一巻(1835)、第二巻(1840)を世に問うた。これが絶賛され、ヨーロッパ諸国で広く読まれるようになった。アメリカにおいても古典として長く読み継がれ、現在でも高等教育の必読書の一つとなっている。同書は歴代大統領の就任演説など多くの機会に引用される。正に、「アメリカン・アイデンティティ」を探る素材として確固たる地位を得ている。

同書で彼はアメリカ社会で最も印象的なことは、自由で人間関係が平等なことであり、それを至るところで経験したと述べている。当時25歳の彼が訪問先の各州で最高権力者の知事や司法関係の高官等エスタブリッシュメントと面談するに当たっても、ヨーロッパとは異なって一切格式ばったところがなく、オープンであった。これは彼にとって平等主義と民主主義の洗礼となった。そして、多くの事例を挙げ、アメリカで「デモクラシー」を見つけたと記している。

アメリカでは政府が物事に干渉せず、国民に国民が持っている能力を十分に発揮できる機会を与えている。多数者の意志のうちですべての権力の源がある。陪審制は国民主権の様式で、自治制度の源泉である。アメリカ大陸に上陸した人々は、直ちに直接参加型民主主義を確立し、全員が集まって討議、決定する小さな共和体(タウン)をつくり上げた。共和制はアメリカの法律、制度の中にしっかりと構築され、アメリカ人の観念、意見、そして習慣の中に浸透している。その連合体が州となり、連邦制へと発展したと、この時、トクヴィルは今日誰もがアメリカについて引用、解説する分析を行った。

彼は平等社会において個人と権力との距離が段々長くなり、それによって民主的専制の主体となる国家権力の暴力の危険性についても理解していたが、アメリカのナイーブな民主主義に感動したのである。

そもそもトクヴィルが訪問目的を越えてアメリカの政治、社会に広く関心を持ったのは、当時ヨーロッパの多くの異なった諸要素が持ち込まれ、しかも強力な中央政府があるわけでもないのに平等社会が実現していると認識したためである。人種だけでも、イギリス、フランス、ドイツ、オランダなどと多様であり、外からはバラバラに見えた。それを実現したのは新天地への移民を決意せしめた宗教心と教育をベースとした自由、平等、独立という利益を共有、実現出来る全員参加の共和体という場をつくり上げたことによる。それによって、多様性の中の統一が実現されていると分析している。

国際関係が複雑な今、かつてトクヴィルが感動したような純度の高い自由、平等を源としたナイーブな民主主義について考えてみるのも頭の整理になろう。

(注) A・トクヴィル著、井伊玄太郎訳「アメリカの民主政治」上・中・下巻、講談社、2002年9月